

環境保全先進国ドイツの地理教科書の読解 (1) — Westermann 社 Schroedel ブランドの Seydlitz Geographie Gymnasium Niedersachsen 9/10 の例—

香川 貴志

Interpretation of geography textbook of Germany as an environmental preservation advanced country (1) ;
A case of Seydlitz Geografie, Schroedel, Westermann publishing company, *Gymnasium* Niedersachsen 9/10

Takashi KAGAWA

Interpretation von Erdkundelehrbüchern in Deutschland dem Vorreiterland im Umweltschutz (1) ;
Am Beispiel von Seydlitz Geografie, Schroedel, Westermann Verlag, *Gymnasium* Niedersachsen 9/10

Takashi KAGAWA

Accepted July 2, 2008

抄録 : 本論文では、ドイツのギムナジウム 9 & 10 グレードの地理教科書の前半（ヨーロッパにおけるドイツ、世界強国としてのアメリカ合衆国、日本と中国）を読解する。そして、その特徴を明らかにし、記載内容の評価を行う。ドイツの地理教科書では、問題提起、問題認識、問題解決の三点が重視されている。細かい事項の暗記を求めない構成、現代社会の地域問題を考えさせる構成は、ともに高く評価することができる。

索引語 : 問題解決, 地理, 教科書, ギムナジウム, ドイツ

Abstract : In this article, the first half of a geography textbook of Germany for ninth and tenth graders in *Gymnasium* (Germany in Europe, USA as a world strong country, Japan and China) is interpreted, the feature is clarified, and the content of the description is evaluated. In the geography textbook of Germany, three points (the problem institution, the problem recognition, and the problem solving) are valued. The composition in which the memory of a detailed matter is not requested and in which regional issues with the contemporary society are contemplated can both be evaluated highly.

Key Words : problem solving, geography, textbook, *Gymnasium*, Germany

Zusammenfassung : In diesem Aufsatz interpretiere ich die erste Hälfte eines Erdkundelehrbuches für die neunte und zehnte

Jahrgangsstufe des deutschen Gymnasiums (Deutschland in Europa, Weltmacht USA, Japan und China). Dabei mache ich die Besonderheiten des Lehrbuches deutlich und bewerte den Inhalt der Darstellung. In deutschen Erdkundelehrbüchern wird viel Wert auf drei Punkte gelegt: Problemstellung, Problembewusstsein und Problemlösung. Die Struktur des Lehrbuches, die kein Auswendiglernen von detaillierten Sachverhalten fordert und die zum Nachdenken über regionale Probleme der heutigen Gesellschaft anregt, verdient hohe Wertschätzung.

Stichwörter : Problemlösung, Geographie, Lehrbuch, Gymnasium, Deutschland

1. はじめに

主要先進国において地域環境や生活環境に対する市民の意識が高まって以降、環境保全の必要性が声高に叫ばれるようになった。そうした趨勢の下、酸性雨による環境悪化が早期から着目されたヨーロッパでは、持続的発展を図る意味からも環境保全が現代社会の焦眉の課題と認識され、様々な施策が日本でも広く知られるようになっていく。その施策の具体例を列挙すれば、自動車の排出ガス規制の強化、中心市街地への自動車進入禁止やロードプライシングの実施、風力発電所の建設や普及、資源ゴミのデポジット制による回収などがある。特にドイツは、こうした施策の先進地域であると認識されるケースが多いように思われる。

このような環境に関わる意識は、自然科学・社会科学・人文科学の全てを包含する地理学において古くから尊重されてきた。しかし、大学や大学院などの高等教育では専門分野が細分化され過ぎて、地理学が本来持っている総合性を見出すことが困難である。そこで本稿では、日本の中等教育（中学校および高等学校）に概ね該当するドイツの中等教育、なかでも総合大学を目指す者の大半が進学するギムナジウムの地理教科書に着目し、その読解と評価を試みる。

ドイツの教育制度は州の権限が大きいので、場所によって多少の違いはあるようだが、まず初等教育学校は 4 年制の基礎教育学校 *Grundschule*、その後の中等教育学校は 5 年制の基礎学校 *Hauptschule*、6 年制の実科学校 *Realschule*、9 年制のギムナジウム *Gymnasium* に分かれ、総合大学へ進学を希望する者の大半はギムナジウムを経由して（諸外国の教科書に関する調査研究委員会 2003 pp.6-7, http://steiner.blume4.net/d_schule.html）、大学入学資格試験のアビトゥーア *Abitur* に合格後、晴れて大学入学を許可される（望田 1998 pp.29-39）。

このように、ギムナジウムは大学進学を前提とした中等教育学校であるが、ドイツでは学校の学年が基礎教育学校の 1 年生から通算して数えられるため、本稿で対象としたギムナジウムの 9/10 年は、日本の中学校 3 年～高等学校 1 年に相当する。そして、ギムナジウム第 10 学年は、第 11～13 学年のギムナジウム上級段階に進む直前の学年で、戦後長らく第 10 学年と第 11 学年との間には生徒数が減るというギャップがあり、それが近年では逆に増えるという現象が生じているという。つまり、前者はギムナジウムからのドロップアウトの発生を意味し、後者は実業学校などからギムナジウムへの編入を意味している（坂野 2000 pp.271-277）。

かかるギャップは、ギムナジウムを最初の 6 年と上級の 3 年に分ける考え方にもつながる。たとえば、本稿で対象とするニーダーザクセン州では、大学からの入学者の学力低下を憂える声を受けて、ドイツ国内でも先駆的なギムナジウム上級段階における学力向上方策が 1970 年前後に各校で次々と導入

されていくことになる。その目的は、生徒の自立性や参加により、動機づけや学力水準の向上を図るものである（今井 1993 pp.120-122）。

こうした自立性の重視は、今日の地理教科書を解読すれば、ギムナジウムの前期（第 5 学年～第 10 学年）にも及んでいる。本稿で対象としたのは、2008 年 1 月下旬に施した Amazon.co.de の書籍検索で、購入できるギムナジウム地理教科書のうち、出版から最も日が浅かったニーダーザクセン州の 9/10 学年のものであるが、次章以下で紹介するように「記憶よりも考察」を求める内容構成が中心となっている。ただ、教科書の全体の内容を紹介し、その評価を試みるには紙幅が不足する。そこで本稿では、表題に記した教科書の全 4 章のうち、前から 3 分の 2 にあたる第 1～3 章について取り扱うこととし、残りの 3 分の 1 にあたる第 4 章については稿を改めたい。もっとも「記憶よりも考察」のコンセプトは、全ての章に共通する特徴である。なお、教科書では、章や節の番号は付されておらず、目次にも見出しが示されるだけである。このままでは、内容を紹介するにも不都合をきたすので、以下の本稿では、大見出しを「章」、小見出しを「節」として、各々に通し番号を付けて整理した。

2. 教科書第 1 章「ヨーロッパにおけるドイツ」の内容の検討

この章では、EU を主としたヨーロッパの中でドイツの位置づけを図りながら、徐々にドイツ各地の特徴的な地域や産業をクローズアップし、末尾の部分で隣国の概要を「調べ学習」で展開するという構成が見られる。全般的に現代社会の問題点を明らかにし、地理的な思考力を育成していこうという強い意思が感じられる内容である。より具体的に記すと、細かな地名を記憶させるのではなく、個々の地域で生じている現象がいかなる意味を持つのか、それが他地域や他国とどのように関連するのかを理解させ、考えさせる内容が満載である。受験との関係で暗記型の授業が多くならざるを得ない日本の現状と照合すれば、知識量の多さでは日本に分があるにせよ、こと地域観察や地域分析の能力の育成に関しては、本稿で取り上げたドイツの教科書に相当な先進性があるように感じられる。以下では、各節の概要を順を追って簡単に紹介し、その評価を行う。章の扉写真は、農業地域と都市地域の両方について新旧の写真を併置し、歴史的変化への関心を呼ぶ工夫が施されている。

(1) ヨーロッパから何を理解するか？ この節では、読者である生徒と同じ 16 歳の男女各 2 名のギムナジウム学生がヨーロッパに対して持つ多様な考えに対し、「貴方はどのように考えますか？」と問い掛ける編集がなされている。節の末尾に設けられた演習が本文とリンクしており、新学期で科目としての地理に興味を持ってもらうには好適な材料が提供されていると言える。

(2) 一体化し成長する大陸 この節は、自由と経済的な富を目指した EU 統合に至るまでの道が決して平坦ではなかったことを述べ、加盟順を示したヨーロッパの地図は、美しくシンプルにまとめられ、生徒がヨーロッパを大観できるような配慮がなされている。ただ、この地図は美的感覚を優先したためか中間色が多くなっており、それゆえに一部の凡例間に見難さが残る。節の末尾の演習では、この地図を活用しながら、現在の EU に至るプロセスを確認させるもの、「もし現在の EU がなければ？」という問いに答えさせるものなどがあり、相応の問題意識がなければ即座に解答できない骨のある設問に驚かされる。

(3) EU 内での不平等 1990 年の東ヨーロッパ地域との交流変化の後、EU 内部にも経済格差が拡大した。その実態についての説明が、本節のタイトルに「不平等」という語が添えられた一因である。

いうまでもなく、EU 内の経済水準は西高東低を示すが、EU は急成長よりは協調と持続的発展を理念にするとの説明は、第 3 章の中国を扱った部分で皮肉のようにも解釈できる表現である。財政黒字である国や地域（県単位）が財政赤字の国や地域を補助する協調システムは EU が他に誇り得る考え方である。節の末尾にある演習の一部にも、こうした両地域の空間的分布を地図ベースで検討させるという、EU 全体を見通せる優れた設問が用意されている。

(4) ヨーロッパの移民 この節では、イラク、コンゴ、アルバニア、アフリカ諸国・諸地域からの難民を受け入れるヨーロッパの現状が最初に説明される。また、コラムではアフリカ西部のモーリタニアからの木造ボート移民の実態が語られる。こうした膨大な数の難民は、経済的には最も恵まれない階層で、その大多数が都市に集まり、そこに彼らの集積する地区が形成される。安い労働力ゆえに、受入国としても需要がある。ただし、老後保障では課題もあるようだ。節の末尾の演習では、出入国管理と国家について、人口シナリオからドイツの政策を議論させるという非常にタフなものがある。

(5) 不足から余剰へー EU の農政ー ここでは、戦後長らく継続していたヨーロッパの慢性的食料不足が、最低価格を保障する EU の農業政策により、域内で自給可能レベルに到達したとの解説がなされる。コラムとなった新聞記事では、甜菜収穫時の労働力不足が取り上げられ、節末に配置された演習では、精糖工業に関わる原料供給としてドイツの甜菜収穫とカリブ海地域のサトウキビ収穫の写真を比較考察させる設問がある。グローバルな視点から産業を見詰めさせる課題として評価できる。

(6) 南オルテンブルクにおける大量飼育 ここでは、ニーダーザクセン州内の当地が 19 世紀末に鉄道開通をみた後、ルール地方の発展を受けての食料需要増大により、アメリカ合衆国から自動給餌システム導入して豚と鶏の大量飼育地となったことが述べられる。動物医療、食肉処理、企業経営が大量飼育を一層発展させたものの、動物の排泄物の問題が生じるなど、全てが順調ではないことも添えられている。ただ、排泄物の問題は、後の (10) で調査対象となるバイオマスエネルギーとも深く関連しており、この節で得た知識が応用できる構成に感嘆させられる。節の末尾の演習では、密度の高い場所での大量飼育を支えるための形態的な特色を考えさせる設問に面白味がある。

(7) エコロジー農業ーバイオは同じバイオにあらずー ここでは、最初にバイオ農業が究極的な農業であると説明し、しかしながらその現状が本来あるべき姿ではないことに疑問を挟んでいる。すなわち、環境意識の高まりが安全で衛生的な農業の在り方を模索させ、その基準を満たして許可された企業が認証ロゴを得て農業生産をシステム化できるようになった、そしてシステム化は大規模化・企業化を随伴するため、バイオ農業本来のエコロジカル農業から乖離しているとの指摘である。節の末尾にある演習でも、認証ロゴに関して考えを問う設問が準備されている。

(8) 農業経営の比較ー大規模経営と小規模経営ー この節では、EU の農業政策が一定規模以上の農家を一層育てるための補助であることを解説し、同時に小規模経営農家にはメリットが小さいという問題点の指摘がなされる。こうした農業政策は成果主義的ではあるが、国際競争力が問われる現代にあつては相応に必要なものであることも認めざるを得ない。コラムでは、シュバルツバルトの小規模農家のつましい営農や暮らしぶりも紹介されるが、前節のバイオ農業が大規模化・企業化していることと併せて考えれば、生徒たちは単純に「大きければ良い」とは思えないはずである。こうした考察を導くように、節末の演習ではドイツの営農構造が問いかけられている。

(9) 特別な文化ーEU のバナナー この節では、ヨーロッパがバナナの大消費地域で、域内でそれが生産できないため輸入依存になり、生産地域間で熾烈化するコスト削減競争が述べられる。そこで採用されたのが、安定供給を目的として特定地域に対して施す免税措置である。受益地域はカリブ海

地域とのことだが、中央アメリカのニッチ的な国々では不満感が高まっているとの指摘もある。節の末尾にある演習には、バナナを EU に輸出したい国々の対応策を考えさせる良問がある。関税の有無に加え、生産コストや輸送コストも考慮する必要がある、深い分析力や考察力が問われる。

(10) **Geo Projekt (地理学的構想) 農村的地域の変化を調べてみる** ここは 4 ページ構成になっており、農村地域の変化について調べる際の視点や方法が盛り込まれている。その流れは、調査の準備、文献やインターネットの調査、まとめの作業、成果の発表からなる。ただ、細かな指示はなされておらず、もっぱらドイツの農業が抱えている問題点や現状がコラムで紹介される。それは、経営の大規模化の流れの中で苦境に立たされる小規模農家の現状であり、コンピュータの営農現場への導入で一層の大規模化を迫られる農家の実情であり、再生可能なエネルギーとしてのバイオマスの導入に向けた模索である。生徒たちの力はもちろん、授業を実践する教員の力も試されるタフな内容といえよう。

(11) **新しいルール地域** 多くの日本人は「ルール地域＝工業集積地域」との理解をしているであろうが、本国ドイツの教科書では 4 ページを割いた記述の大半が、サービス業や研究拠点として生まれ変わるルール地域の紹介に充てられている。こうした変化を余儀なくされたのは、採炭量の低下に伴う基幹産業（製鉄・鉄鋼業）の衰退であるが、それを地域の後退に帰結させない再生手法が、工場跡地を活用したスポーツ施設や文化活動施設の建設である。工業地帯であったがために豊富な人口集積があることも諸施設の顧客確保に貢献していると判断できる。節末の演習では「一週間の休暇をルール地域で過ごすとしたら如何なる計画を立てるか？」というユニークなものもあり、様々なメディアを活用した作業が生徒たちに課されている。

(12) **ミュンヘン—ミュニコン・バレー？—** この節では、第二次大戦以前に相応の中心性を誇っていたミュンヘンが、ベルリン封鎖にともなって有名企業の一層の集積を経験し、産業中心としての地位を固めた経緯が述べられる。今日では技術産業やエレクトロニクスの先進地域として著名であること、研究機関と企業との産学協同の動きが活発化していること、周囲に自然が豊富で文化・芸術の分野でも先進的であることも添えられる。しかし、こうした発展の反面で、物価や地価の上昇が市民生活に負担増大をもたらしたとの指摘もなされる。節の末尾の演習では、大学や研究機関がミュンヘンに集積する意味を問う設問が印象に残る。

(13) **ライプチヒ—発展する東部—** この節では、第二次大戦前にドイツ第 4 の都市であったライプチヒが、東西ドイツ分裂後に亜炭を原料とする工業都市になったものの、東西統一後は工業の衰退を余儀なくされ、失業者を増大させたとの略史が語られる。そして、その窮地から脱するために、ポルシェ、BMW の工場やドイツ郵便 (DHL) 拠点誘致などの再生策がとられたとの説明もある。こうしてライプチヒは将来を期待される都市となった。節末の演習の一部では DHL, BMW, ポルシェのライプチヒへの投資を評価させるという経済地理学的な設問が認められる。

(14) **パーペンブルクのメヤー・ヴェルフト造船所—世界市場における家族的企業—** この節では、ドイツ北西部のニーダーザクセン州が誇る造船会社マイヤー・ヴェルフトが紹介されるが、その工場所在地のパーペンブルクは、詳しい地図帳でなければ載っていないエムス川河口から約 40km 遡った地にある。ここはエムス川の流域面積が小さいため河床への堆積物が相対的に少なく、それが造船所の立地基盤になったとの解説がある。元来は木造船の造船所が集積していた当地で、マイヤー・ヴェルフトだけが鋼船へと展開し、漁船を主とした造船から客船の築造に至る過程を知れば、この節の副タイトルの意味を理解できる。造船所の雇用効果が大きいこと、遊覧船による「港めぐり」などの街づくり実践例なども説明される。節の末尾の演習では、マイヤー・ヴェルフトがパーペンブルクに拘る

理由を答えさせるという、暗記作業とは程遠い設問が準備されている。

(15) サービスへ展開する企業集団—プロイサク株式会社から TUI 株式会社へ— この節では、ニーダーザクセン州のハノーファーに本拠を置く TUI (Touristik Union International) について、その事業展開の解説がなされる。当初はルール川流域の鉱山採掘権を持っていたこの会社は、敗戦により全ての事業が崩壊したものの、戦後の再興過程で 1964 年に社名をプロイサクとし、1990 年代末に旅行サービス会社を買収した直後に社名を TUI に変更した。21 世紀に入ってから国際テロ多発で旅行部門は打撃を受けたが、組織の一部の売却を断行するなどのリストラによって財政再建に成功したとの記載もある。節末の演習では、TUI の経営戦略を考えさせる厚味に溢れたものがみられる。

(16) フォルクスワーゲン—ニーダーザクセンのグローバル企業— ニーダーザクセン州はおろか、ドイツが世界に誇るフォルクスワーゲンについての解説がこの節の狙いである。州内ウォルフスブルクにある主力工場の空中写真は、1991 年 6 月には累計 6000 万台目の車輦を出荷したとの記述ともに大きな誇りに満ちている。東西統一後、ドイツ周辺諸国にも進出し EU の発展に寄与していることに加え、海外生産拠点の拡充が世界経済の発展に貢献しているという記述は、オーストラリアと南極を除く世界の大陸制覇が目にあたりにできる地図を伴っているので説得力に溢れている。その場所選定理由を考えさせる節末の演習問題は秀逸である。

(17) 輸出の専門的職人—ドイツ— この節では、ドイツが世界に冠たる輸出大国であり、国土の位置や人的資源で優位性を築いていること、それが一層の富と仕事をドイツにもたらしていることが説明される。輸出大国である所以は、2 枚のグラフから明らかである。つまり、うち 1 枚では貿易黒字額の順調な伸張が表現され、もう 1 枚は付加価値の高い自動車・自動車部品、機械、化学製品が輸出品で群を抜く高い構成比であることが理解できる。貿易相手国を示す表からは、EU 域内の相手国がドイツの貿易相手国として卓越していることも分かる。節の末尾にある演習には、上述の (11) から (16) までの内容を復習させながら取り組ませるものもあり、教科書の構成にも配慮した設問に感心させられる。ただ、節の配列は、この節と次節 (18) とを逆にする方がベターではないかと思われる。

(18) エアバス—ヨーロッパの威信をかけた構想— ここでは、多数の航空機製造会社が乱立していたヨーロッパが、国際競争 (主にアメリカ合衆国) で勝ち残るために総力を結集して取り組むプロジェクト「エアバス」が紹介される。各種の交通手段を使って部品を輸送し、ツールーズやハンブルクの工場で最終製品に組み立てる経営が、写真を効果的に使いつつ描かれている。世界の航空ファンを驚愕させた総二階建て旗艦機 A380 の英姿も誇らしいが、同機の開発に際しての滑走路延長問題、2006 年に公表された初期受注機の受け渡し日の延期問題にも触れており、宣伝に終始しない姿勢には好感が持てる。節末の演習の一部には、エアバスの製造過程で生じる不利な点を指摘させるものがあり、一拠点型のボーイングと比較する力量が問われている。

(19) Geo Projekt (地理学的構想) 隣国フランス、英国、ポーランドの空間分析をしよう この節では 4 ページが割かれ、文献、新聞・雑誌、インターネットなどのメディアを通じた資料収集、グループを構成して分析するなどの共同作業についての方法が説明される。日本風に言えば「調べ学習」に関するノウハウの解説に該当しよう。後述するように、例として取り上げられるのは節タイトルにある 3 カ国だが、文中では同様の作業を他の隣国、例えばオーストリアやオランダについても促している。様々な資料を活用した分析結果について、グループ内で検討を加え、それを人に分かり易くプレゼンテーションするまでの手順が丁寧に解説されているのも好ましい。全体を通じて、まず個人で考えた結果を出し合い、それを基盤にして議論を進めることの大切さが説かれており、自主性と協調性

の同時育成を図っている点が高く評価できる。

(20) Geo Projekt (地理学的構想) 我われの隣国・フランス この節から (22) までは、事例国の簡単な紹介がなされ、そこから一層深く考察させる、あるいは他国でも同様の分析と検討をさせるというモデルになっている。フランスに関しては、パリへの一極集中が説明された後、それが高速鉄道 TGV の路線図、農業収入の地域格差を県レベルで示した地図で裏付けられる。日本では「フランスは実は農業国」との説明が多くなされるが、ドイツのこの教科書ではフランスをむしろ工業国として扱っている。

(21) Geo Projekt (地理学的構想) 我われの隣国・英国 この節では、産業の母国としての英国が紹介される。初期の綿工業から始まり、石炭採掘とそれを活用した蒸気機関の導入による産業革命に関する説明である。石炭採掘に関しては、19 世紀後半ウェールズの狭い坑道における少年労働を描いたコラムにより、当時の劣悪かつ非人道的な労働条件が浮き彫りにされている。世界都市ロンドンが港湾・産業都市から現代的なサービス拠点に変貌したとの説明は、業種別に集計されたロンドンの労働構造に関するグラフを活用すれば容易に理解することができよう。

(22) Geo Projekt (地理学的構想) 我われの隣国・ポーランド ここでは、フランスや英国とは異なり、農業国的な色彩が濃いポーランドの断面が描かれている。七面鳥を飼育する農家の紹介を通じて、彼らの営農が小規模かつ農薬や肥料を多く使用しないものであることを理解できる。こうした記述だけでなく、データとして示される農業関連の様々な指標は、ドイツとポーランドの比較が容易なグラフに仕上がっていて好感が持てる。また、エコロジカルな農業が西ヨーロッパ各地からの観光客の人気を呼んでいることは、近年「アグリツーリズム」として注目される、日本では殆ど知られていない農村体験である。先述した (7) や (8) と併せて考えれば、農業を通じて得られる知識にも幅が出てこよう。

(23) Geo Wissen (地理学的実践) ヨーロッパにおけるドイツ この節は、第 1 章の総決算のような内容を持っている。2 ページにわたる見開きにはヨーロッパ全域を大きな家屋に例えて、その壁や窓には既習事項に関するイラスト (様々な交通、様々な産業、様々な会議やパーティー、様々な国旗、巨大な 1 ユーロ硬貨、これらの情景を双眼鏡で眺めるアメリカ人など) が満載されている。そして、この絵を活用して考えさせる課題が添えられる。既習事項の復習を促す内容であるが、短答式で暗記事項を問うような課題は無く、むしろ EU の現状と問題点に対する興味や関心が問われている。調べれば分かるものは極力排除し、理解して考えられる能力の開発や育成にシフトした思い切りの良さは、日本の地理教育が受験対策に腐心しているうちに失ってしまった大切なものに他ならない。

3. 教科書第 2 章「世界強国としてのアメリカ合衆国」の内容の検討

この章では、北アメリカ大陸からの事例地域としてアメリカ合衆国だけが取り上げられており、隣国カナダに関しては、自然的または統計的な関連でのわずかな記述があるのみである。こうした事例地域についての絞込みの潔さは、前章でドイツの隣国として取り上げられたのがフランス、英国、ポーランドの 3 カ国だけであったことと共通する。そして章扉の見開きになったロサンゼルス of 景観写真が、都心の超高層オフィスビル群、安普請の都心周辺部の倉庫や中小オフィスを全て写し込んでおり、この写真だけでアメリカ合衆国の典型的な大都市を説明できるほど素晴らしい。また、その一画に添

えられたカンザス州における企業の経営の小麦畑の写真は、アメリカ合衆国が巨大な農業国でもあることを雄弁に語る仕掛けになっている。以下では、教科書第 1 章の場合に準じて、各項目の概要の紹介と評価を行う。

(1) **自然的諸相** ここでは、北アメリカ大陸（アメリカ合衆国とカナダ）の地勢と気候が、日本の地理教科書でも通例になっている雨温図や気候区分図で説明される。ただし雨温図では、降水量に関する部分にも折れ線が施されていて多少の読み難さが残る。気候区分はケッペンのものではなく、ディルケアトラスなどの地図帳で普遍化している気候帯をベースにして、海洋性と内陸性との違いによって更に区分していくという手法が採られている。また、地勢と気候だけにとどまらず、アメリカ合衆国で頻繁に大きな被害をもたらしているブリザード、竜巻、ハリケーンについての簡潔で分かりやすい説明が添えられている。ともすれば、人文地理学的要素と遊離してしまいがちな自然地理学的要素を、ニュースで見ること多い自然災害とリンクさせることによって、生徒の関心を呼ぼうとしている点が高く評価できる。

(2) **Geo Praxis（地理学的実践）アメリカ合衆国の国立公園** この節では、広大な国土をもつアメリカ合衆国の国立公園をリストで示し、その指定や管理運営に関わる手続きを説明している。その過程で 3 つの柱になるのが、事前計画、（案の）作成、そして実行である。これら 3 つの柱については、各々の内容が箇条書きで整理されて生徒の理解を支援しているが、それらはあくまで骨子であり、詳細な説明には至っていない。したがって、ここで次のステップに進もうとすれば、教員には指導力が問われることになる。互いに異なる 3 つの柱を持つ国立公園について、教員は上述したリストを活用しながら生徒を適切な作業に誘導しなければならない。大方の授業実践では、リスト内のウェブサイトアクセスして「調べ学習」を命ずることになると推察されるが、これらのサイトは当然ながら英語で記載されているので、教師と生徒の双方に外国語運用能力が求められるは言うまでもない。

(3) **農業—農場からアグリビジネスまで—** ここでは、肥育牧場（フィードロット）とセンターピボットによる灌漑農業の営農形態が、景観写真を伴って対比的に説明される。生徒はアメリカ合衆国が世界有数の農業国であることを容易に理解できよう。日本の地理教科書と最も異なっている点は、フィードロットやセンターピボットが単なる用語や景観写真に留まらず、そこで営農する農家の実態にまで踏み込んだ説明を伴っていることである。特にフィードロットについては、肥育牧場の全体規模は大きくとも、それに関わる農家は小規模な家族経営も多いとの説明もある。以上のような営農内容の理解は、節の末尾に添えられた演習問題でも試されるが、その中には「アグリビジネスと比較しながら、ジム・パーク氏（具体例として出てくる営農者）がいかにして小規模農場を営んでいるのかを述べなさい」という、暗記では片付けられない優れた設問も認められる。

(4) **カリフォルニア—アメリカ合衆国のフルーツ園—** この節は 1 ページだけの短いものであるが、カリフォルニアの果実・野菜栽培が全米をリードしている実態は、過不足なく簡潔に説明できている。中でも注目できるのは、コラム的に取り上げられたトマト生産とトマトの缶詰加工である。ここを読めばアメリカ合衆国の企業の農業と食品工業のリンクが上手く理解できるが、生産や加工の現場でヒスパニック系の移民が労働力として活用されている現実も押さえられている。学びの結果としての知識量は日本より少ないかもしれないが、現代社会を地理的な見方で解釈する能力の育成に関しては、ドイツの教科書に一日の長があると断じて過言ではなからう。

(5) **地球上の巨大な農業生産地** この節も 1 ページだけの短さで、前の節に続いて農業大国の実態を説明する。西経 100 度線を基軸にした適地適作の農業地域区分は見慣れたもので新鮮さは無いが、主

要な河川や都市も書き込んだ地図は、それぞれの農業地域の場所を特定するのに便利である。節の末尾にある演習問題でも農産物輸出と関連させながら問われるのだが、主要な農産物についてアメリカ合衆国が全世界で占めるシェアを示したグラフは、資料集や統計書を開かなくてもよい配慮がなされており好印象である。

(6) **アメリカ合衆国—地球上の主導的な経済力** この節は、アメリカ合衆国の製造業を取り上げ4ページ構成になっている。それゆえに内容も充実している。例えば、製造業が展開する主要地域に関しては、北東部、五大湖岸、アパラチア山脈周辺の伝統的工業地域に加え、サンベルトやウェストコーストにおける特定産業に特化した新しい工業地域も明示している。景観写真についても、伝統的工業地域におけるレンガ造りの工場に対比させて、新しい工業地域の典型としてマイクロソフト社のオフィスを並列配置するなどの工夫が認められる。また、伝統的工業地域に関しては、五大湖岸の各都市における工業が相互補完関係にあり、それらが湖上輸送によって結びついていることが簡潔に説明されている。こうした事実関係の認識に留まらず、実生活との関連で生徒に対してリアリティを与える工夫も織り込まれている。コラムに配置された、4つの工業都市に暮らす労働者の声は、ステレオタイプの理解につながってしまう危惧が棄てきれないものの、新旧の工業地域を理解させるには好適な教材となり得よう。ここで取り上げられている都市(企業)は、ヒューストン(エクソン=モービル)、デトロイト(ダイムラー=クライスラー)、シアトル(ボーイング)、シリコンバレー(マイクロソフト)であり、いずれもが著名な都市(地域)と世界企業である。節の末尾にある演習問題は、教科書第1章のドイツにおけるルール工業地帯と比較させるという、地域スケールの違いを踏まえた応用力の試用、アメリカ合衆国の貿易赤字の急増の背景を問う設問など、地理学的センスや応用力を要するものに感心させられる。

(7) **世界規準を支配する新しいアメリカ企業としてのグーグル** この節では、急成長企業の代表としてのグーグルが取り上げられ、その企業発展が世界規準の構築、さらにアメリカ合衆国による文化的支配の普遍化などの文脈で解説される。節の末尾にある演習問題の一部では、グーグル社の階層別企業拠点を示した世界地図をもとにして、同社の経済的発展とその意味を書かせる設問がある。この地図を見れば、企業拠点の展開は欧米中心ながら、アジアでは日本やインドから企業拠点が設置されている事実を把握できる。

(8) **アングロアメリカにおける移民の成長** ここでは、近年におけるアジア系やヒスパニック系の急増、もはや彼らが少数派ではなくなりつつあるというアメリカ社会の変化が解説される。まず、大陸の東側から西側にかけて、順に英国・フランス・スペインの植民地経営が開発のフロンティアを西進させてきた事実が語られるが、過去から今日までの変化だけでなく、2050年には白人が半数未満になるとの予測グラフも提示されている。節の末尾にある演習問題では、その予測グラフをベースにして、移民構成の時系列的な変化を説明させる設問もある。グラフに描かれた内容の読み取りや補足説明の指示は他の節でも多くみられるもので、実社会における応用力の育成が計画的に図られている点进行评估できる。

(9) **巨大都市ロサンゼルス** この節では、サンベルトからウェストコーストにかけて人口100万人以上の都市が多く分布することを示し、その中でも極度に巨大な都市圏をもつロサンゼルスが詳しく説明される。その都市圏の規模が説明される中で、網状に発達したハイウェイ(教科書ではAutobahnと記載)の存在、それに導かれた郊外への水平的拡大をみた戸建て住宅群の特徴が語られる。郊外住宅の存在については、次節の「地理学的構想」において自動車社会でのエネルギー浪費に気付かせる

構成がとられている特徴からも、教科書では決して肯定的に提示していないことが分かる。

(10) Geo Project (地理学的構想) アメリカ式の生活 本節では、イリノイ州シカゴの郊外住宅地で暮らす家族の生活が描かれる。その文章はドイツ語ではなく簡単な英語であり、リアリティを増すための工夫が面白い。地理学習をしながら語学面でも国際性が身につく配慮として評価できる。収入相応の費用で建設した木造住宅は、アメリカンドリームを体現するほど大きくなく、ダウンタウンやショッピングモールに行くにも、ハイウェイを走ることを余儀なくされる。前節のロサンゼルスでの演習問題で、こうした自動車社会を考えさせるものがあり、公共交通機関が脆弱であることの弊害が疑似体験的に学べる意義は大きい。

(11) 世界都市ニューヨーク「ビッグアップル」 この節では、ニューアムステルダムと称されたニューヨークの草創期から現代に至るまでの都市史が語られる。ただし、マンハッタン島の他に関する記述は僅かである。国連本部や数多くの企業の集積、2001 同時多発テロの痕跡であるグラウンド・ゼロに加え、チャイナタウンやリトル・イタリーを典型とするエスニック空間の説明も盛り込まれている。そして、これらがアメリカ社会の縮図であるとの解説は、異文化の人々の同化に関する新聞記事を評論させる演習問題とあいまって、ニューヨークがサラダボウルであることを的確に示している。

(12) Geo Wissen (地理学的知識) 世界強国としてのアメリカ合衆国 この節では、カナダを含む北アメリカ大陸の地勢を表現した地図上で、国名・都市名・海域名・山脈・地域名を回答させる演習があり、如何に地理的な見方や考え方を重視するドイツの地理教科書にあっても、最低限の地名は記憶しておくべきであるとの方向性が示される。この他の演習では、地形発達史的に3枚の写真を並べて、その判断理由を説明するもの、NBAの本拠地の改善を考えさせるゲームなど、ビジュアルに、あるいは楽しみながらアメリカ合衆国の地誌を学ぶ仕掛けが施されている。また、ヨーロッパの地図にアメリカ合衆国の輪郭線を重ねた地図では、ドイツの領土の大半はカナダ領土の緯度帯に位置すること、地中海のほぼ全域がアメリカ合衆国の国土に包含されることなど、地図ならではの驚きが提供されている。

4. 教科書第3章「日本と中国」の内容の検討

この章の扉写真は、現代中国の都市発展の象徴である上海市の都市景観を被写体として、ありきたりの東方明珠塔ではなく、上海体育館付近の都市高速ジャンクションが用いられている。所狭しに並ぶ超高層住宅群、高架軌道を走る地下鉄(3号線)、その傍らにはヨーロッパ・スウェーデン資本の家具店IKEA(漢字表記で「宜家家居」)があり、誰もが圧倒的なスケール感に驚愕するであろう。しかし、これとて上海市では都心周辺部から近郊への入口あたりの景観である。このように、日本と中国を扱った本章では、さしもの世界都市・東京も、扉写真を同じ世界都市・上海に譲っている。このことは、ドイツにおいても中国への注目が高まっていることの証左になり得よう。以下では、教科書のこれまでの章と同じく、各項目(本稿では「節」と表記)の概要の紹介と評価を行う。

(1) 日本と中国にみる台頭する東アジア この節では、本章がクローズアップする二つの国家である日本と中国の工業生産力や経済成長を簡潔に解説している。国内総生産ではアメリカ合衆国・日本・英・独・仏の後塵を被る中国ではあるが、その経済成長率は主要先進国の比ではないことが語られる。節の末尾にある演習の一部でも活用される地図が2枚掲載されているが、一方は世界人口に占める各

国人口の比率を面積調整して表現したユニークなもの、もう一方が工業における世界での売上げ上位 100 社の分布を国ベースで表現したものである。両者を比較すれば、人口規模の割に売上げ上位企業が極端に少ない中国やインドが、低コスト生産の拠点となっていることを容易に理解できる。節の冒頭に示された、コンピュータを駆使する日本の自動車生産現場、多くの労働力で生産に励む中国の靴製造業現場、これら 2 枚の写真の対比が上記の地図の比較に際して意味を持つことは言うまでもない。

(2) **日本の自然的地域と国民** 晴天下に富士山を背景に走る新幹線、東京の交通渋滞と人並みなど、日本の観光ガイドブックでお馴染みの景観写真がステレオタイプの印象を与えることは否定できない。ただ、本節の真骨頂は、日本は狭い国土でありながら、それに加えて山がちで国土ゆえに可住地面積が限られることを表現した簡潔な説明である。その理解を助ける図面は、交通機関としては新幹線だけを取り上げたシンプルなものに人口密度を重ねた地図であり、多少の地理的センスがあれば、ここから地形を想像することは容易である。海拔高度 100m までの領域に総人口の約 8 割が集中している事実を示したグラフは、海拔高度別の人口密度も併せて表示しており、その表現のユニークさに感心させられる。

(3) **自然的大惨事の危険にさらされた日本** この節では、その地形・地帯構造の特徴からもたらされる、日本にとっての自然的脅威が説明される。火山、台風、地震や津波がもたらす被害状況に留まらず、それらの発生メカニズムが模式図をともなって解説されるのは、日本では教科書において珍しく、むしろ資料集や地図帳の担当領域である。節の末尾にある演習でも、自然災害が生じる理由を考えさせる工夫がなされており、「記憶よりも考察」という姿勢の一貫性が評価できる。

(4) **現代日本における宗教と伝統** ここでは、現代日本で観察される事項をベースにして、日本文化の基層に迫ろうという意気込みが感じられる。厳島神社の鳥居を背景に和服の女性が立つ写真、鎌倉大仏に参詣する人々の写真は、安物のガイドブック風で噴飯ものだが、一方で、冒頭から神道信者と仏教信者の合計が総人口を上回る理由が述べられ、いわゆる「神さま仏さま」の実態があらわにされる。日本とドイツの教育システムを比較させ、現代の若者文化をパンクファッションで着飾った男女の写真から考えさせる試みは、日本の地理教科書では稀有どころか皆無の項目ではなかろうか。

(5) **日本の集約的農業** この節は 1 ページだけの構成であり、その中で気候や地形に応じて営まれる日本の農業と林業が簡潔に説明される。農作物の栽培北限を示した地図には、米、茶、みかん、二毛作と二期作が表現されているが、日本に関するこうした地図を見る機会が少ないだけに、日本人が見ても驚かされる。先に学習済みの本章 2 節の内容と併せれば、農業とともに林業が取り上げられていることの理由が判断できよう。

(6) **日本の経済力** この節は 3 ページという変則構成で、旺盛な工業生産に支えられた日本の経済力の根源が語られる。戦後復興から高度経済成長期を経て、日本は輸出型産業の興隆と輸入制限（関税障壁）で目覚ましい経済成長を遂げたが、それが重化学工業の製品だけではないことをコンピュータ・ゲーム機（プレイステーション 3）の写真が上手く表現している。「貿易黒字額でみるとドイツは日本よりも凄い」と一目で分かるグラフが添えられていることは、お国自慢と言おうかご愛嬌である。また、産業の実例として、自動車産業がクローズアップされる。大手自動車メーカーの国内工場の企業別展開、そして全ての欧州自動車メーカーを凌ぐ規模のトヨタ自動車が、いかに世界展開を図っているのかが示される。節の末尾に配置された演習では、日本国内の自動車メーカー工場の分布特性を問ったものが、本章 2 節で説明済みの地形環境と絡めて考えた場合に面白味のある設問になりそうである。

(7) **首都であり世界都市でもある東京** この節では、現代日本の首都としての東京が、2 ページで効

果的に説明されている。山地や丘陵を削っての谷埋めや東京湾埋め立てを紹介しつつ、密集した市街地ゆえに地震発生時には多大な危険が伴うことも強調されており、単なる日本の首都の紹介に留まっていない点が評価できる。コラム的な記事の「東京の日常」は、早起きして遠距離通勤し、仕事が終わって直ぐに帰宅せず、酒場やカラオケで人付き合いをしてから深夜帰宅するというサラリーマンの哀しい生活が描写される。彼の住まいは（東京の）周辺地域としか記されていないが、勤務先は都心の新宿である。新宿を含む東京都心の土地利用図は出色であるが、遠距離通勤をコラムで取り上げるならば、首都圏全体において東京特別区への通勤率が把握できるような地図を示した方が、過度に肥大した日本の大都市圏を表現するには適切であったのではなかろうか。

(8) 世界国家への道を歩む中国 本章のこれ以降は中国に関する節が続く。まず本節では、諸外国による支配を経て、改革開放経済のもと外国資本を取り込んで成長する中国の様子が総論的に記される。海外からの直接投資の積極的な受け入れについては、節の末尾の一部に、日本への海外直接投資額と比較させるという演習がある。超高層ビルが林立する上海市浦東地区の写真はドイツでも驚愕されようが、その中で一番高い金茂ビルも 2008 年中には隣に立地する森ビルに高さ首位の座をわたす。このように、中国の大都市では最新の写真が直ぐに古くなるという教科書編集上の悩みが尽きない。

(9) 中国の大地形 この節では、中国の国土の大きさがウラル山脈以西のヨーロッパに近いことを最初に説明し、それゆえに多彩で雄大な地形が多く見られることを紹介している。地形の特色は、華北、華南、華中、内モンゴル、チベット高原、北西（新疆ウイグル）の 6 地域に分けて説明される。これらの各地域は、次の第 10 節で数字やアルファベットを記入した手書き地図にまとめられており、節の末尾にある演習では、都市、河川、山脈、低地、景観を地図帳で調べて記入させるようになっている。ドイツ人にとっては中国の地名が馴染み難い（発音し難い）と思われるが、それゆえに作業を課したのであろうか。

(10) Geo Praxis（地理学的実践） 前節の説明にリンクした手書き地図の説明があり、両節の相互利用を図りながら前節の演習に取り組むための素材が提供されている。

(11) 気候と農業 ここでは、熱帯から冷帯、湿潤帯から乾燥帯に至る中国全土の気候の多彩さが解説され、それに対応した営農のアウトラインが述べられる。気候帯については、日本での分類を借りると、南から北へ向かって熱帯～温帯～冷帯と展開するが、乾湿の差異は北西が乾燥し南東が湿潤という構成である。こうした気候分布に対し、耕地率は全般的に海岸部や主要河川に近いほど高い数値を示す。これらを組み合わせて考察を促す演習が節の末尾の一部にあるが、気候に応じた効率的な農業経営が沿岸部において想起される。コメの三期作を表現したモデル図からは、僅か 4ヶ月で収穫に至る稲作の凄味に驚かされる。

(12) 一人っ子は果たして幸せな家族なのか？ この節では、人口爆発を避けるための一人っ子政策の導入と、忠実にそれを守った人々への報奨が説明される。恵まれた世帯は、自家用車を保有して高級マンションで暮らし、子どもは有名幼稚園に通うという。しかし、孔子以来の男尊傾向の中で、中絶される女兒が多いという問題点も指摘され、近年における一人っ子政策の一部緩和（一人っ子同士の夫婦なら複数の子どもを持つことが出来る）の紹介もなされている。節の末尾にある演習では、一人っ子政策をめぐる問題点や展望に関わる問いかけが連続してなされ、今日の中国における人口問題を多面的に理解させる工夫が施されている。

(13) 国内各地の様々な生活 この節は、次節との組み合わせで構成されており、まず季節労働者の供給元である農村地域の様子を描いている。季節労働者が都市へ出稼ぎに行くのは、都市と農村の間

の経済格差、さらに複数の子どもがいる世帯からの送り出しであることが理解できる。そして、こうした農村から出た労働者が行き着く先の都市の様子を記述したのが次の節である。

(14) 都市での様々な生活 ここでは、前節の内容を受けて、季節労働者の職場の様子が語られる。その多くは都市における建設ラッシュを反映して、建設現場を渡り歩くという一種の移動職場であるという。また、成功した一部の労働者が都市に滞留し、そこでの生活を謳歌するケースも紹介されている。さらに、コラムとして上海の季節労働者の生活が描かれているが、彼らにとっての一番の贅沢が、家族と話すための携帯電話であるというのが印象深い。前節の内容も含めて、本節の末尾に設けられた演習の一部では、中国社会における季節労働者を評価させる作業がある。そこに記された季節労働者の数が約1億5千万人というのは、日本の総人口を上回る数であり驚きを禁じ得ない。

(15) 世界のための人材銀行 この節では、欧米市場への進出で成長する中国の工業生産拠点（上海周辺～広州）が解説される。生徒たちは、家庭用品の多くがこの地域での生産物であることに気付くはずである。こうした輸出指向の強い品々が中国国内の巨大市場に流通していることの説明にも抜かりは無い。前節で扱われた季節労働者についても触れている。工業生産の拠点のうち、とりわけ香港・マカオ・広州の華南三角地帯については、新聞記事を引用したコラムでも詳述される。急成長した深圳は「一漁村から中心都市へ」と紹介され、雑然とした木造家屋の背後に現代的な超高層ビルが林立する写真もあいまって、読み手に強烈な印象を与える。節の末尾に設けられた演習の一部でも、この写真を題材にして中国の急発展を問うものがある。多くの回答が導けそうな優れた設問といえよう。

(16) なりふり構わぬ経済成長 ここでは、工業製品に代表される中国の経済成長、それに伴う自動車の普及が、大気汚染をはじめとする地球規模の環境問題を起こしつつあることが解説されている。そして、これらは韓国や日本にとって由々しき問題であるとの指摘が続く。とりわけ、エネルギー消費の約70%を占める石炭は排出ガスが多く、鉱山の状態や労働条件も良くないため、2004年には6000人の鉱夫が犠牲になったことも紹介されている。また、経済成長に伴う水不足（特に華北）や河川・海洋だけではなく地下水にまで及んでいる水質悪化の深刻さが指摘されているが、水質悪化が節の末尾にある演習で再度問われているのは、この問題が人々の生活と密接に関連することの証左であろう。

(17) 三峡ダム この節では、中国の国家プロジェクトを代表する三峡ダムの説明がなされる。モンsoonによる流量の季節変動に加え、流域の森林伐採が洪水を多発させ、その被害を食い止めるプロジェクトであるとの解説である。ダムの規模が数値で示されるが、ドイツ人が理解し易いようにライン河谷と比較するような演習が節の末尾に設けられており、提示された数値に意味を持たせている点に感心させられる。

(18) Geo Praxis (地理学的実践) 影響構造について取り組む ここでは、三峡ダム建設の功罪について、様々な要素を考慮に入れて考え議論できるような誘導がなされている。前節におけるライン河谷との比較でプロジェクトの巨大さを実感させていること、開発に疑問を挟む見方も添えられていることから、ディベート形式の授業に持ち込めば面白味があるように思える。

(19) Geo Wissen (地理学的知識) 日本と中国 この節は、日本と中国の主要都市・主要河川など地名を答えさせる地図が提示される。ちなみに日本で問われる都市名は、東京・大阪・名古屋・札幌・広島 of 5都市である。演習的な作業では、グラフを提示して日本と中国の経済発展を比較させるもの、玩具の輸出入量を国土の広さを歪めて表現した変形地図を見せての、討論の呼びかけである。変形地図は、例えば輸出に関するものだと、世界地図でありながら香港がリアリスティックに見えるほど部分拡大された図になっている。逆に輸入についてみると、欧米諸国がメタボリックに肥大して描かれ

ている。

5. 小括一本稿のむすび、および続編(2)に向けて―

ここまで記したことからも明かなように、ドイツの地理教科書では「記憶よりも考察」の姿勢が貫かれている。これは、第1章の章末で引用した「生徒の自立性や参加により、動機づけや学力水準の向上を図る」という理想の具体化に他ならない。

したがって、知識の詰め込みはギムナジウム9/10年生の地理教科書では殆ど認められず、それは教科書が扱う対象地域の思い切った絞り込みに現れている。自国の中でも各州を個々に詳述することは無く、特徴ある都市や産業に焦点が定められ、その特徴を示すに至った歴史、現況や将来の問題点が描かれる。

ドイツ国内で取り上げられる都市(地域)は、それが工業をテーマにしたものであれば具体的な企業名(メヤー・ヴェルフト造船, TUI, フォルクスワーゲン, エアバスなど)が明記され、その事業展開も述べられる。特定企業を判別可能な形態で取り上げられない日本の教科書では、トヨタの自動車生産が「中京工業地帯を代表する輸送用機械機器の生産」と記述され、長崎の三菱造船が「深く湾入する地形を活かした大型船の建造」と記載されがちである。経済や現代社会とリンクさせて生徒に興味や関心を持たせるには、ドイツの地理教科書のように企業名を出し、その世界規模での事業展開まで話題を広げた方が、リアリティの追究に繋がり得るものが多いのではなかろうか。つまり、現代社会における様々な地域事象を、政治的・経済的活動の反映として捉え、そこから一層の地域発展や地域活性化に不可欠な課題を洗い出して、その解決策や改善策を模索していくという姿勢である。

続けて自国の周辺で扱われる国々も、ニーダーザクセン州の場合は、フランス、英国、ポーランドだけであり、しかもそれらの内容は網羅的ではなく、特定分野に限定したトピック的なものである。ニーダーザクセン州の他で使用される教科書は未見だが、例えば南西部のバーデン・ヴェルテンブルク州であればスイス、南部のバイエルン州であればオーストリアが隣国の事例として取り上げられているのかもしれない。その確認は今後の課題としておきたい。

さらに海外地域についてみると、日本の地理教科書も前回の指導要領改訂によって、取り扱い地域を網羅的にする必要がなくなったが、今回対象としたドイツの地理教科書は、アメリカ合衆国、日本、中国を扱う他は、最後の章(第4章「一つの地球―一つの世界」)において、インドが特徴的に取り上げられるだけで、他国の扱いは皆無に等しい。これは、ドイツとの関わりが強い国々を取り上げることで、そうした国々に関する最低限の知識を得させるだけでなく、対象となる各々の国で注目される事柄(例えば日本では、地震や台風などの自然災害、高い経済力、世界規模の自動車生産、過密都市・東京の通勤事情など)を事例化して、他国を対象にする際にも「問題提起(発見)→問題認識→問題解決」の順に進める能力の育成が図られていると解釈できる。

以上のように本稿では、ドイツのニーダーザクセン州におけるギムナジウム9 & 10グレードの地理教科書の前から3分の2を読解し、その特徴を明らかにするとともに記載内容の評価を行った。残りの3分の1は、全地球規模での諸問題、世界各地の地域問題が主に扱われる。これらについても「記憶よりも考察」という基本姿勢が貫かれていることは言うまでもない。その紹介と評価については、近い将来に本稿の続編としてまとめる予定である。

参考文献

- Amtsfeld, P. et al, 2007, *Seydlitz Geographie, Gymnasium Niedersachsen* 9/10, Westermann, 192 S.
http://steiner.blume4.net/d_schule.html 「ドイツの学校制度」(2008年5月21日, 最終確認)
- 今井重孝, 1993, 『中等教育改革研究—ドイツギムナジウム上級段階改革の事例—』, 風間書房, 287p.
- 望田幸男, 1998, 『ドイツ・エリート養成の社会史—ギムナジウムとアビトゥーアの世界—』, ミネルヴァ書房, 289p.
- 坂野慎二, 2000, 『戦後ドイツの中等教育制度研究』, 風間書房, 345p.
- 諸外国の教科書に関する調査研究委員会, 2003, 『ドイツの教科書制度』, 教科書研究センター, 136p.